

ニッポン

人・脈・記

海、その不思議⑦

命のゆりかご 森になれ



沖縄県・阿嘉島の海に潜り、育てたサンゴをみる大森信さん

エメラルド色にきらめく海。ウエットスーツに身を包んだ大森信(70)が、小舟からスリリと海中にすべりこんだ。海底に植えたサンゴを、水中メガネで見回る。

沖縄の離島、阿嘉島。人口300人余り。ここに、大森が所長をつとめる「阿嘉島臨海研究所」がある。サンゴを卵から育てる人工増殖で世界をリードする。

「この半世紀で世界のサンゴ礁の3分の1が消えた。原因は海の汚染や開発です。いま新たに3分の1が危機にさらされている」

大森は東京水産大(現東京海洋大)の名誉教授。もともとプランクトンを研究していた。40代の初め、太平洋の島国パラオに出張し、サンゴ礁の美しさに心ひかれる。帰国して、東京で不動産管理会社を経営する保坂三郎(65)とダイビング仲間になった。いっしょに阿嘉島の海で潜る。

なんて見事なサンゴだろう! 「潜水の拠点をつくるさう」「ぜひなら研究できる設備を」。話がはずみ、本気になった保坂が私財3億円を出す。財団として認められ、88年、研究所が生まれた。

大森が当時、「サンゴの産卵を観察したい」と話すと、漁師が笑って言った。「石が、卵など産むものか」。サンゴはイソギンチャクに近い動物だが、外見から石の

一種と思う人が、まだいた。

98年の夏、大森は海の中で不思議な光景に出会う。サンゴが淡いピンクやレモン色に輝いている。今年、やけにきれいだな――。花園のような光景は、しかし、不吉なサインだった。

高い水温が引き金となり、サンゴが白っぽくなって死んでゆく「白化現象」。その前兆だった。

「サンゴの森があった海底が、空襲後の焼け野原みたいになった。ショックでしたね」

大森たちはサンゴを増やす研究へと、かじを切る。生まれたばかりのサンゴの幼生は、水中を泳ぐ。そして、くっついて育つ場所をさがす。彼らがくっつきやすい素材は何だろう?

試行錯誤に3年。素焼きの陶板を1カ月ほど海水に漬け、表面が微生物などに覆われると、幼生がうまくくっつくことを突きとめた。海藻が幼いサンゴの成長をじやますることもわかり、巻き貝に海藻を



茅根創さん

温暖化に負けるな サンゴ移植

食べさせる手法もあみ出す。05年、手塩にかけた3センチほどのサンゴ20株を、阿嘉島の海に植えた。昨年はさらに2千株。「まだまだ、これから。年に10万株くらい移植できるようにしたい」。夢は広がる。

大森たちの研究成果はいま、領土保全という国家プロジェクトに生かされようとしている。

日本の最南端、太平洋の絶海に浮かぶ沖ノ鳥島。このサンゴ礁の島は波に浸食されている。ほっておくと、いずれ海中に沈む。そうなれば日本は、天然資源などの権利にかかわる約40万平方キロの排他的経済水域を失ってしまう。

東大教授の茅根創(48)はサンゴを増やし、島を守ろうと唱えた。大森とは、日本サンゴ礁学会の設立を一緒にすすめた仲だ。04年、「サンゴのちからで沖ノ鳥島の水没は防げる」と研究会で力説した。

「サンゴ礁は100年で20センチから40センチ重くなって、新たな地形をつくる。地球温暖化による海面上昇と競争になる」と茅根。

こと5月、大森の協力で水産土木建設技術センターが育てたサンゴの株が、現地には運ばれた。実験は始まったばかりだ。

サンゴ礁は多くの種類の生き物を育み、海の熱帯雨林といわれる。しかし、前米副大統領アル・ゴア(59)とともにノーベル平和賞を受けたIPCC(気候変動に関する政府間パネル)は「温暖化が進めば、サンゴの白化現象はさらに増える」と予測する。

大森は思う。人の営みが今日のサンゴ礁の危機を招いてしまった。自分たちの技術を、サンゴが減ってしまった海外の島国にもぜひ役立ててほしい。

「陸の植林のように努力を続ければ、きっと成果が出る。そして海の森をほんとうに復活させるには、サンゴが健やかに育つ海の環境そのものを取り戻すことが、どうしても必要です」(山本智之)

人をめぐる物語をお寄せください。電子メールはjimmyaku@asahi.com